

## 『久安百首』の「短歌」

### —— 長歌形式による述懐の方法 ——

野 本 瑠 美

#### 一 はじめに

崇徳院主催の『久安百首』は、春・夏・秋・冬の四季部六十首、恋部二十首、雑部二十首から構成されており、雑部内はさらに神祇・慶賀・釈教・無常・離別・羈旅・物名・短歌に細分されている。この雑部末尾の「短歌」とは、実際は長歌形式による詠歌のことである。『古今集』以来生じた短歌・長歌の名称の混乱による呼称である。本稿では以下、『久安百首』雑部や『古今集』等の長歌を意味する「短歌」については鉤括弧を付して示し、詠歌形式（五・七・五・七・七）の短歌とは区別して示すこととする。

『久安百首』「短歌」は、「春」や「神祇」など詠むべき主題を表す他の部類名とは異なり、詠歌形式に基づく設定であるが、『古来風体抄』の記述によれば、実際には長歌形式による述懐歌の詠進が求められていたようである。

崇徳院に百首の歌人々に召し、とき、「おの／＼が述懐の歌は、みな短歌に詠みて奉れ」と仰せら

れて侍りしかば、おの／＼「短歌」と書きて長歌を奉り侍にき。

このような長歌形式による述懐歌の設定にはどのような目的があったのだろうか。崇徳院が先行する『堀河百首』の継承を企図していたことはよく知られており、この「短歌」にも、『堀河百首』「述懐」題で詠まれた源俊頼の長歌が念頭にあったと指摘されている。また、百首の部立構成から、「新しい勅撰集の資料とすべく企画」されたために「勅撰集の部類に連なる」ような部類と歌数の提示が行われたとも推定されており、俊頼の長歌を遡って『古今集』巻十九などにみられる述懐的な内容をもつ「短歌」が意識されていたとも考えられる。

確かに、『久安百首』「短歌」は、それまでの勅撰集や『堀河百首』の形式に倣ったものとも見える。しかし、『久安百首』には、羈旅部のように、先行する勅撰集では比較的歌数の少ない部に対し雑部最多の歌数を割り当てるといった、既存の勅撰集の構成にとらわ

れない独自の方針も見受けられる。また、詠進した歌人の「短歌」についても、俊成の「短歌」が「述懐の意を籠めつつこの百首の跋のような役割りを果している」ことや「他の人々の哀切さや述懐調に対し」親隆の「短歌」には述懐色が見られないといった指摘がなされており、個々の「短歌」にも不遇沈淪を嘆くにとどまらない内容や役割があるようである。本稿では『久安百首』『短歌』の表現に着目しながら、この「短歌」設定にこめられた意図を考察していく。

## 二 『久安百首』以前

まずは『久安百首』に至るまでの長歌や述懐歌の歴史を確認しておきたい。柿本人麻呂によって一つの達成を見た長歌形式は、短歌形式に比して次第に詠作数が減少していき、平安期に入ってからほとんど詠まれなくなったが、不遇沈淪の訴嘆や死を悼むといった場面では「特にあらたまった印象を与える」表現形式として命脈を保っていた。なかでも、訴嘆調の長歌は、『古今集』に収められた撰者の貫之・忠岑による長歌を先蹤として、以後、曾禰好忠・源順・大中臣能宣・清原元輔・源重之らに受け継がれて行き、院政期には源経信・大江匡房・源俊頼（『堀河百首』での詠作も含む）らの詠作を経て『久安百首』『短歌』へと至る。

一方、漢詩文に由来する「述懐」は、『万葉集』に既に見られ、平安期には大江千里の「句題和歌」や

『和漢朗詠集』などを経て次第に和歌の世界へと浸透した。歌合などの晴の場では不遇を嘆く述懐的な内容の和歌は長く忌避されてきたが、『堀河百首』の「述懐」題設定を経て、歌人たちの詠作意欲が傾けられる主題として定着し、社頭歌合での「述懐」題設定の出現がその流れを決定的なものにしたという。『堀河百首』は述懐歌の歴史において画期を成す作品であり、なかでも、不遇意識の表明を要請する「述懐」題と長歌を結びつけ、訴嘆調の長歌を公的な場に再浮上させたのが俊頼の「述懐」題長歌であったと言える。

さて、『堀河百首』の俊頼詠には「埋もれて ひく人もなき 嘆きすと…（略）…このもかのもとに 立ち交じり うつぶし染の 麻衣 花の袂に 脱ぎかへて 後の世とだに 思へども 思ふ人人 ほだしにて 行くべきかたも まどはれぬ かかる憂き身の つれもなく 経にける年を 数ふれば 五つの十に なりにけり…（略）…くり返し 心にそはぬ 身を恨むらん」（二五七六）と不遇を嘆く表現が頻出する。『堀河百首』の「述懐」題歌には、俊頼のように「憂き身」を嘆き「恨む」歌は多く、「身の憂さは過ぎにしかたを思ふにも今行く末の事ぞかなしき」（一五七二・師頼）や「人数ならぬ身の憂さ」（一五八三・肥後）「愁はれせぬ身」（一五八二・隆源）などの表現が見られる。

しかし、不遇沈淪を嘆くのが「述懐」の全てではな

かった。『堀河百首』「述懐」題では、不遇感の表出を含め、四つの主題が見られることが指摘されている。先に掲げた詠のように〈不遇感〉を表すものが七首と最も多いが、他にも「何をして翁さびげん朝ごとに鏡の影をかつとがめつつ」（一五六九・公実）のような〈嘆老〉を主題とする述懐が五首、「風を待つ草葉の露をおほけなく蓮の上に宿れとぞ思ふ」（一五七〇・匡房）のように〈往生・仏道への希求〉を詠むものが三首見られる。

また、堀河天皇への祝意を表す〈慶賀〉の歌も一首見られる。

月みてもむなしき空にあまるまで君が千代へん事をこそ思へ（一五七一・国信）

堀河天皇の御代の永続を願う歌であるが、他の歌人の「述懐」題詠には見られない主題であり、詠者国信の堀河天皇近臣としての特異な事情を読み取る説もある。しかし、遡れば、漢語「述懐」は憂愁に限定されるものではなく、「内なる心情を表白する」意で用いられており、『万葉集』などに見られる「述懐」もほぼその意と解せる。平安期には「述懐」は次第に感傷的・詠嘆的な内容へと限定されてゆくものの、祝意を込めた「心明るい述懐」とも呼ばれる、長元八年（一〇三五）「住吉社述懐和歌」のような例もある。『堀河百首』国信詠のような祝意を込めた「述懐」は、数は多くはないものの特異な発想というわけではないだ

ろう。

それは、同じ『堀河百首』「述懐」題詠の中に、〈慶賀〉に近接する詠作があることから推測できる。〈不遇感〉を主題とする歌の中に次のような一首がある。

あきらけき世にはうれしく逢ひながら愁はれせぬ身をいかにせん（一五八二・隆源）

ここでは「あきらけき世にはうれしく逢」えたと堀河天皇の御代を寿ぎつつも、そのような御代に逢いながらも「愁はれせぬ身」を嘆いてみせている。主題は〈不遇感〉の表出にあるが、「あきらけき世」と当代を賛美することによって、結句「いかにせん」は万策尽きたという慨嘆というよりも、「あきらけき世」だからこそ事態は好転するのではないか（あるいは「何とかしてほしい」というような期待がこめられていると解せるのである）。

訴嘆の一手段として〈慶賀〉の心が詠まれることは、遡れば『古今集』「短歌」にも確認できる。たとえば、忠岑歌（古今集・雑体・一〇〇三）では「：身は下ながら 言の葉を 天つ空まで 聞こえあげ 末の世までの 跡となし 今も仰せの くだれるは：」「ひとつ心ぞ 誇らしき」と卑官の身でありながら撰者選ばれたことを喜びながらも、長歌の中心部分では「かかるわびしき 身ながらに 積もれる年を 記せば 五つの六つに なりにけり」「身は卑しくて

年高き ことの苦しき かくしつづつ」と不遇と嘆老を訴え、最後に「君が八千代を わかえつつ見む」と醍醐天皇の御代の永続を祈念する。慶賀と不遇沈淪の表現は相反するものではなく、述懐という場において近接する場合もあるのである。

以上のように、『堀河百首』には〈不遇感〉〈嘆老〉〈往生・仏道への希求〉〈慶賀〉といった述懐の主題が確認された。加えて、先の『堀河百首』隆源歌や『古今集』忠岑長歌に見られたような、身に余る栄光を表す措辞を〈慶賀〉と区別し、ここでは〈謙辞〉と呼ぶこととする。この五つの要素をもとに、『久安百首』「短歌」でどのような述懐歌が詠まれているかを確認したい。

### 三 『久安百首』「短歌」の述懐

『久安百首』「短歌」には、『堀河百首』「述懐」題詠に見られた五つの要素が、一首の内に複数組み合わせられて登場する場合が多い。季通の「短歌」を例に見てみよう。(五つの要素に該当する箇所は傍線を付した。〈不遇感〉は棒線——、〈嘆老〉は波線~~~~、〈往生・仏道への希求〉は二重線——、〈慶賀〉は点線……、〈謙辞〉は太線————で示すこととする。)

おほきみの みことかしこみ かしこみて 数に  
も入らぬ 身なれども この百歌を 奉る 藐姑  
射の山に すみわたる 荒き獣を おしなべて  
驚き走る 事もなく むなしき船を 浮かべたる

海に漂ふ 魚もみな みなぎる事も なしとか  
や かかる時には あひながら 我が身一つは  
いつとなく 頭の霜は 朝ごとに 払ひもあへず  
翁草 一人枯れ野に 立てれども これをしの  
ぶる こともなみ 涙の雨は 露ばかり とどま  
る人も 七久里の 出湯しほどし おぼゆれば  
いづれの方へ いなむしろ しかじや今は 嵐吹  
く 嶺の木の葉と もろともに 散りなん後も  
思ひおく 事はさすがに おほ空を はるかに独  
り 眺むれば 霞の内に 雁がねの 消えみ消え  
ずみ 定めなく 南に去りて 帰り来む ほどを  
待たでや いかならむ 雲の絶え間に 入る月の  
傾く影に さしそへて 心を西に やりてこそ  
後の世をとも 営まめ それも契に よりけれ  
ば 何ともなくて 行く水の 哀哀と 言ひなが  
ら すぎの板戸の いたづらに 明暮れ物ぞ 嘆  
かしき 今は我が身に いくばくの 春秋とかは  
とはるべき たとひ久しく 長らへて 経ぬる  
月日を 重ぬとも 夢に夢見し 唐人の 覚めて  
の後に そのごとく わく事もなき まとめをば  
いかばかりかは 思ふとは知る (四九九・季通)

#### 反歌

世に経るはわがおほきみの哀てふなげの言葉を待  
つと知らずや (五〇〇・季通)  
季通はまず「数にも入らぬ 身なれども この百歌

を「奉る」と百首を詠進することになった我が身を卑下しつつ、「藐姑射の山に すみわたる」以下、治世の平穩な様子を詠み上げ院の治世を寿いでいる。波線部分「我が身一つは いつとなく 頭の霜は 朝ごとに 払ひもあへず 翁草」から傍線部分「一人枯れ野に 立てれども これをしのぶる こともなみ」で、老齡となり人に顧みられることのない身を嘆き、それでも「散りなん後も 思ひおく 事はさすがに おほい」と、心に掛かることの多さを訴え、二重傍線部分「心を西に やりてこそ 後の世をとも 営まめ」と後世のための仏道修行を思い描きつつ、「哀哀と 言ひながら すぎの板戸の いたづらに 明暮れ物ぞ 嘆かしき 今は我が身に いくばくの 春秋とかは とはるべき」と、むなしく時を過ごし齢も残り少ないことを嘆く。そして反歌では「憂き世でむなしく年を重ねているのは、院からの「あはれ」を待っているからだとはご存じないのでしょうか」と崇徳院からの憐憫を期待する詠みかけで締めくくっている。謙遜・慶賀・嘆老・不遇感・後世への願いという『堀河百首』に見られた述懐の要素を全て含む長歌を受けて、そのような憂き世に猶とどまっているのは院の「あはれ」を期待しているからだと不遇感の解消を反歌で表明したものと捉えられる。

季通の例にとどまらず、『久安百首』『短歌』には様々な述懐の要素が組み合わされている。次に掲げた

表は『久安百首』『短歌』見られる述懐要素を一覧にしたものである。左から順に、作者名、長歌の句数、反歌の有無をまず示し、次いで五つの要素に該当する表現がある場合に○を付した。比較対象として最下段に『堀河百首』の俊頼の長歌のデータも掲載している。

【表】『久安百首』『短歌』の述懐要素一覧

	句数	反歌の有無	述懐の要素				
			不遇	嘆老	仏道	慶賀	謙辞
崇徳院	43						○
公能	33						○
教長	53			○			○
顕輔	41	有	○		○		
季通	91	有	○	○	○	○	○
隆季	63		○			○	○
親隆	23					○	
実清	39						○
顕広	95	有	○			○	○
清輔	47		○				○
堀川	53		○			○	○
兵衛	25			○			○
安芸	167	有	○	○	○	○	
小大進	61		○			○	○
俊頼	151	有	○				

長歌形式のため、歌人によって句数は様々である。最小で全二三句、最大で一六七句と幅はあるが、十人の歌人が複数の述懐の要素を組み合わせて詠んでいる。「堀河百首」にくらべ、長歌という形式上字数に制約されなかったことが要因の一つとも考えられるが、相違点はそれだけではないようである。

『堀河百首』の述懐歌で大半を占めていた〈不遇感〉の訴えは『久安百首』『短歌』でも重要な要素であることに変わりはない。しかし『堀河百首』には殆ど見られなかった〈慶賀〉や〈謙辞〉の表現が『久安百首』『短歌』では頻出するのである。特に〈謙辞〉は顕輔・親隆・安芸を除いて全ての歌人が要素として取り入れている。また述懐の要素が一種類しか見られない場合でも、崇徳院・公能・実清は〈謙辞〉、親隆は〈慶賀〉を主題としており、〈不遇感〉を単一主題とする『堀河百首』の俊頼長歌とは趣を異にする。短歌・長歌といった詠歌形式以上に、述懐の主題選択に関わる部分で『堀河百首』と『久安百首』は大きく異なるのである。

『久安百首』の述懐詠の特徴を具体的表現に即しながら確認していこう。前文では〈慶賀〉や〈謙辞〉の頻出と説明したが、具体的には百首作者に加えられた喜びや歌の出来映えへの不安、謙遜が『久安百首』『短歌』では数多く表されている。

烏羽玉の 黒髪山に 降る雪の 白し黒しも 知  
らずして 和歌の浦わの 諸人と 人なみなみに

立ちまじり むなしき名のみ 音羽川 音ばかりには 聞こゆとも まことは更に 夏木立 ことのはじまり かきつめて ももくさまでも なりにけり そのあざけりは はばかりの せきやりがたく 思へども 君がみことの 末なれば いなばの露も いなひけと 思ひあまりに 津の国の 難波の事も 忘れられて よき節もなき 萎れ葦の 下には淀む 水の泡の 漏らして後も よとともに なほ消えかへり 恥づと知らずや (八〇〇・実清)

実清詠では「白し黒しも 知らずして 和歌の浦わの 諸人と 人なみなみに 立ちまじり」と和歌の良し悪しも判別できない自分が人並みに百首作者へと加えられ、世間からの「あざけり」を受けることを恐れながらも、畏れ多い院の下令により分別も忘れ「よき節もなき」歌を世に広めることになってしまったと、拙い和歌を恥じて奉献の挨拶としている。同様に公能も「風の聞こえを つつめども：やがてやみなば なほ惜しく 思ひあまりに 書きつむる」(一九九)と人の風聞を恐れて詠進を躊躇うものの、応制百首作者となる名誉を辞退する惜しさに思い余り、「見む人のそしらん事も はばかりず 百歌数を つらねつるかな」と、他人の譏りも憚らずに詠進したという百首奉献までの経緯を述べて院への挨拶に代えている。<sup>\*19</sup>  
このような、院の命令を受ける臣下としての立場

は、濃淡はあれど詠進した歌人の大部分に見られる。

たとえば、崇徳院近臣の教長は「短歌」で自身の老齡を繰り返し嘆きつつ「くるくる君に 仕ふとて 思ひ離れぬ 憂き世なりけり」(二九九)と院に仕えるために憂き世を離れられないのだと訴え、老臣としての我が身を強調している。主君として仰ぎ見る崇徳院から恩恵を賜ることを期待する詠も多い。前掲季通の反歌で「我がおほきみの哀てふなげの言葉を待つ」(五〇〇)と歌われていたように、「ただ一筋に 君をのみ 頼む心に」(二九九・安芸)や「哀れてふ言の葉」(一三〇〇・反歌・安芸)、「あはれてふ言の葉をだに」(三九九・顯輔)、「哀れをかけて」(一一〇一・堀川)といった措辞が散見される。さらに、「あはれ」といった漠然としたものではなく、より具体的な願望を表明する「短歌」もある。

君が代は 木高き松の 陰なれや 栄えいとども  
ときはまで 木ずゑはるかに おひのほりう  
れしき事を 緑なる 願ひをみつの 品みれば  
その下にすむ 我らさへ 雲井も高く なりぬべ  
し 多くの年も おくれども 風のけしきも や  
はらかに 枝をならさぬ 言の葉は 幾千とせと  
も 限らざりけり(七〇〇・親隆)

親隆は点線部分で「君が代」の繁栄や永続といった(慶賀)の心を表しつつ、その間隙に「願ひをみつの 品みれば その下にすむ 我らさへ 雲井も高く

なりぬべし」と、三位の下に位置する自分たちもいずれば位階が上昇するであろうと希望をこめて詠みかけている。百首詠進時、親隆は正四位下であり、その後保元三年(一一五八)に従三位に叙される。撰闕家司や院別当などを務め正四位下までに昇った親隆にとつて、公卿の地位はあと少しで手が届きそうな切実な願望だったと考えられる。

願望は自身のものだけに留まらない。小大進は「色かへぬ 竹のこどもの 末の代を 御垣のうちに 移し植ゑて 匂ふときくの 花ならば 霜をいたたく 老の身も 時にあひたる 心ちこそせめ」(一四〇〇)と我が子の行く末に対する願望を「短歌」末尾に託している。小大進の子には、石清水別当光清を父に持つ成清と小侍従がおり(『石清水祠官家系図』『今鏡』)、保延三年(一一三七)に光清が亡くなった後、小大進は子どもら連れて花園左大臣家に祇候していた。有仁の庇護の下、成清の元服が計画されたが石清水八幡の夢告により中止され、その後成清は覺法親王\*20のものとて天養元年(一一四四)に出家したという。久安三年(一一四七)には有仁が没し「事に於いて無縁\*21」(『古事談』・第五・一一話)となり成清は高野山へと移った。小大進の「短歌」は子どもたちの将来に明るい展望を見いだせない現状を踏まえた詠作と考えられるのである。

以上のような、百首作者に加えられた喜びや自詠へ

の謙遜、主君であり主催者である院から与えられる恩恵への期待、具体的な願望の表明といった特徴は、『堀河百首』述懐詠には見られず、『久安百首』以前に催行された社頭歌合における「述懐」でも確認できない。一方、勅撰集に入集した長歌には共通する点が見いだせる。先にも掲げたが、『古今集』巻十九所収の忠岑の長歌（一〇〇三）では、卑官の身でありながら勅撰集撰者に選ばれた光榮と謙遜を表し、不遇なまま年を重ねた我が身の窮状を訴え、醍醐天皇の御代が未永く続くのを長命を保って見たい、と結んでいる。〈謙辞〉〈不遇〉〈嘆老〉〈慶賀〉といった述懐の要素が複数見られる点で『久安百首』に近似する。さらに左近衛府から右衛門府への転出を嘆く部分では「近きまもりの身なりしを 誰かは秋の 来る方に あざむきいでて 御垣より 外の重守る身の 御垣守長々しくも 思ほえず 九重の なかにては 嵐の風も 聞かざりき 今は野山し 近ければ 春は霞に たなびかれ 夏は空蟬 なきくらし 秋は時雨に 袖を貸し 冬は霜にぞ 責めらるる」と自然の景物や漢語を和語に和らげた措辞を用いながらも具体的に窮状を訴えようとしている。忠岑長歌と並んで『古今集』に収められた貫之の長歌は醍醐天皇に「古歌奉りし時」の歌で、献上した歌々の内容を詠み込みつつ、「すべらぎの おほせかしこみ 巻卷の 中に尽くすと…拾ひ集め とれりとすれど…漏りやしぬらむ」

（一〇〇二）と遺漏を懸念する。先の忠岑長歌のような具体的な願望は表明されないものの「昼夜わかず 仕ふとて かへりみもせぬ 我が宿の しのお草生ふる 板間あらみ 降る春雨の 漏りやしぬらむ」と、奉獻する歌の収集と編纂に昼夜を問わず精励したために疎かになった生活の窮乏が示されており、そのような生活からの救済を婉曲に願っているものと解せる。『古今集』では、貫之歌には「古歌奉りし時の目録のその長歌」、忠岑歌には「古歌に加へて奉れる長歌」という詞書が付されているが、これは真名序が「各献一家集並古来旧歌」と記す勅撰集資料としての歌集献上を指すと考えられる。しかし、『久安百首』歌人の一人である清輔は、貫之詠に「此集撰之時召歌也」（古今集勸物）、忠岑詠に「同前」と注しており、『古今集』撰進時の献歌と捉えていた。清輔以後も顕昭（古今集注）や定家（顕注密勘）に同様の解釈が見られ、平安末期から鎌倉初期において両首が勅撰集撰進時の歌と認識されていたことがうかがえる。完成した『古今集』を下命者である醍醐天皇に献上する際、撰者達が長歌を付し、様々な思いを述べるという構図は、百首末尾に長歌による述懐を置き、下命者である崇徳院へ献上するという『久安百首』と一致する。『久安百首』「短歌」は『古今集』撰者による「短歌」を念頭に置き設定されたものであり、そのような設定の背後には、百首詠進を命じた院自身と詠者たち

の関係を、醍醐天皇と『古今集』撰者の関係に擬える意図があつたのではないだろうか。

#### 四 『古今集』「短歌」と『久安百首』「短歌」をつなぐもの

献上する作品に対する謙遜と自身の願望を詠みこんだ『古今集』撰者の長歌であつたが、以後このような性質の長歌は『久安百首』まで見られない。長い空白期間において、なぜ再び『久安百首』でこのような長歌が登場したのだろうか。また、『久安百首』に見られた直截的な願望の表出も『古今集』の長歌の表現方法とは些か異なるようである。

このような『古今集』と『久安百首』の間隙を埋めるものとして、詩序の存在が考えられる。『古今集』の忠岑長歌が漢文の構造を持つこと、とりわけ詩序や書序に依拠していることはすでに指摘<sup>\*25</sup>されているが、平安期における詩序の作例数は長歌の比ではなく、内容にも『久安百首』「短歌」と類似した点が見られる。

詩序とは詩宴で作られた詩群の初めに置かれる序文のことで、主催者が出席者の中から執筆者（序者）を選出し行事の概要を記録させたものである。詩序は駢文で記されるため、相応の力量を持った儒者でなければ序者は務まらず、序者に任じられることは大変な名誉であつた。『本朝文粹』では十四卷中四卷、『続本朝文粹』では十三卷中三卷が詩序に充てられ、院政期には詩序のみを集めた『詩序集』も編纂された。詩序は

平安中期以降、願文や申文以上に重要な文体と見なされていたと言える。

平安時代の詩序の構造について、佐藤道生氏<sup>\*26</sup>は三段から成るとし、第一段は詩宴を構成する物的要素（建物、人物、景物）を賛美する内容、第二段は詩題を多様な表現方法を用いて叙述し、第三段は詩宴が終わりに近づいたことを述べ、序者の謙辞で締めくくるというのが一般的な形とする。さらに、第三段の謙辞中では序者が自らの願望を明示することが許されていたという。木戸裕子氏<sup>\*27</sup>はこの第三段にあたる部分を「自謙句」と呼び、貞観・延喜期では詩序の構成要素として必要不可欠ではなかつた自謙句が、次第に重要性を増していき、院政期にはほぼ全ての詩序が自謙句を備えるに至るとする。

『久安百首』「短歌」には「かかろみことの 長さに入江の藻屑 かきつめて とまらん跡は 陸奥のしのぶもぢぢり 乱れつつ しのぶばかりの 節や無からん」（九〇一・顕広）のように崇徳院の下命により拙い作品を献上したと自作を謙遜する表現が見られたが、詩序においても「良香謹奉<sup>二</sup>高名<sup>一</sup>、不<sup>二</sup>敢違<sup>レ</sup>之。聊染<sup>二</sup>疎毫<sup>一</sup>、上<sup>二</sup>其都序<sup>一</sup>云<sup>レ</sup>爾」（本朝文粹・卷九・都良香「陪<sup>二</sup>左丞相東閣<sup>一</sup>聽<sup>二</sup>源皇子初学<sup>一</sup>周易<sup>二</sup>」）や「臣之不敏、粗以叙<sup>レ</sup>之。謹序」（本朝文粹・卷十一・紀納言「惜<sup>レ</sup>秋斲<sup>一</sup>殘菊<sup>一</sup>各分<sup>二</sup>二字<sup>一</sup>」）といった自謙句が散見される。『久安百首』では「葦

根這ふ 憂き身の程を：松が枝に 千代に一度 咲く  
花の 稀なる事に いかでかは 今日にあふみに「  
(一〇〇二・清輔)」と不遇な境遇ながら和歌詠進とい  
う榮譽に浴した喜びを表すが、詩序においても「如  
臣者、久積<sub>二</sub>草蚩之耀<sub>一</sub>、漸老<sub>二</sub>木雁之間<sub>一</sub>。材異<sub>二</sub>櫟  
樟<sub>一</sub>、待<sub>二</sub>七年<sub>一</sub>而有<sub>レ</sub>媿、榮同<sub>二</sub>菊蕊<sub>一</sub>、榮<sub>二</sub>一日之逢<sub>レ</sub>  
恩。猥奉<sub>二</sub>綸言<sub>一</sub>、敢陳<sub>二</sub>縷旨<sub>一</sub>云<sub>レ</sub>爾。謹序」(本朝文  
粹・卷十一・後江相公「重陽日侍」宴同賦<sub>二</sub>寒雁識<sub>二</sub>秋  
天<sub>一</sub>「応製」と、長年学問に励むも報われなのまま老  
いてしまった嘆きと、そのような身ながら重陽の宴と  
いう晴儀に参会できた喜びが表されている。

また、前節で確認したとおり、『久安百首』には露  
骨な願望を「短歌」に詠み込む傾向が見られた。詩序  
においても「臣有二事、非<sub>レ</sub>富非<sub>レ</sub>寿。家貧親老、  
庶不<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>官云<sub>レ</sub>爾」(本朝文粹・卷八・野美材「七夕  
代<sub>二</sub>牛女<sub>一</sub>」惜<sub>二</sub>曉更<sub>一</sub>「応製」)のように「どのような官  
職でもよいから得たい」という願いや「匡衡雖<sub>レ</sub>霜台  
秋冷留<sub>二</sub>薄命<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>愁仕<sub>レ</sub>朝。而風樹曉驚歎<sub>二</sub>微禄<sub>一</sub>之未<sub>レ</sub>  
報<sub>レ</sub>母。恍忽如<sub>レ</sub>忘。曲垂<sub>二</sub>恩私<sub>一</sub>云<sub>レ</sub>爾」(江吏部集・  
上・「七言。秋夜陪<sub>二</sub>右親衛員外亞相亭子<sub>一</sub>」守<sub>二</sub>庚申<sub>一</sub>同  
賦<sub>二</sub>秋情月露深<sub>一</sub>詩一首。并序)と「彈正少弼(霜台)  
では老母に報いることができないため、格別の恩顧を  
賜りたい」という主催者への要望、「三席待<sub>レ</sub>問、宿  
望繫<sub>二</sub>春卿之蹤<sub>一</sub>」(本朝統文粹・卷九・在良朝臣「七  
言初冬陪<sub>二</sub>右親衛納言書閣<sub>一</sub>」同賦<sub>二</sub>松猷<sub>一</sub>「遐年寿<sub>二</sub>「<sub>レ</sub>教

詩一首(以<sub>レ</sub>長為<sub>レ</sub>韻。并序)」と「後漢の桓榮(春卿)  
のような侍読」という具体的な地位が示された例など  
が見られる。<sup>\*26</sup>

木戸裕子氏は、自謙句の内容が①自身の不才を述べ  
る、②自身の不遇を託つ、③恩恵を願う、の三種に分  
けられると指摘し、平安時代半ば以降は②③がしばし  
ば見出だされること、特に院政期には自謙句の内容の  
類型化が進み、不遇をかこち主人の恩恵を求めるもの  
が少なくなるとする。

『古今集』には見られなかった『久安百首』の直截  
的な願望表現も、平安期における詩序の表現からの影  
響を受けたと考えれば不自然ではない。詩会とは、本  
来宮中で行われる公的な色合いの強い行事であった。  
そのような晴れの場の詩序では、主催者が強く意識さ  
れ、序者は自己を卑下し願望を強調することで、その  
ような序者の才学を認め、恩恵を与えてくれた主催者  
を理想的に描き出したという。<sup>\*30</sup>『久安百首』詠進者た  
ちは「短歌」という設定から、『古今集』撰者の「短歌」  
を想起したであろうが、帝に奉獻する立場を具体的に  
詠じようとした時、このような詩序の表現を念頭に置  
いていたのではないだろうか。

## 五 おわりに

従来『久安百首』の「短歌」の先蹤としては、まず  
『堀河百首』の俊頼「述懐」長歌が想定されてきた。  
『堀河百首』の『久安百首』に対する影響の大きさは

疑いようもないが、「短歌」については『古今集』撰者による「短歌」を先蹤としたと捉えるべきだろう。

崇徳院が『古今集』「短歌」に倣う述懐歌を設定したのは、『古今集』における下命者と撰者の関係を『久安百首』において再現する意図があったと考えられる。『久安百首』下命とほぼ同時期に新しい勅撰集(のちの『詞花集』)の編纂も構想されており、『久安百首』自体が、勅撰集を強く意識した試みであった。また、醍醐天皇を含め歴史上の理想的な(帝)のふるまいに倣おうとした崇徳院の志向とも関連するだろう。

『古今集』仮名序には、和歌によって人々の賢愚を知り、理想的な君臣の関係を築いた「いにしへの世々の帝」や「奈良の帝」、それに比肩し得る醍醐天皇が描かれていた。臣下の訴嘆を正しく掬い上げ、埋もれていた才能を見出すことは、為政者の理想的なふるまいであった。崇徳院が「堀川の 流れを汲みて」(久安百首・短歌・一〇〇)と継承を目指した堀河天皇も、臣下から訴嘆を受け憐れみをたれている。

堀河院御時源俊重が式部丞申しける申文にそへて、中納言重資卿の頭弁にて侍りけるとき  
つかはしける

日の光あまねき空の気色にも我身ひとつは雲隠れ  
つつ(金葉集・雑上・六〇二・俊頼)

これを奏しければ、内侍周防を召してこれが返しせよと仰せ言ありければつかうまつれる

何か思ふ春の嵐に雲晴れてさやけきかけは君のみぞ見ん(同・六〇三・周防内侍)

俊重の申文に俊頼が詠じた述懐歌を添えて奉ったところ、望みが叶うだろうという返歌を賜ったという。『散木奇歌集』には俊重がその後式部丞に任じられたことが記されている。このほかにも行宗から寄せられた述懐歌(金葉集・雑上・五二二)や堀河天皇が俊頼の嘆きを聞き、花鬘の寄進を免除したという逸話(『今鏡』・すべらぎの中・玉章)も残されている。『今鏡』の逸話が事実を伝えるものかは明らかではないが、平安末期にすでにこのような伝承があったことは確かであろう。早すぎる死と相まって、堀河天皇は理想的な(帝)として様々な形で後世に伝えられた。

崇徳院も臣下から様々な述懐歌が寄せられていた。清輔は和歌によってたびたび昇進を願い(『袋草紙』)、俊成は『久安百首』の部類の際に次のような還昇を望む歌を贈り、叶えられている。

四品に叙してのち崇徳院の御かたの還昇はいまだ申さざりし比、百首の歌部類してたてまつるべきよしおほせられたりし次に奉りし  
雲井よりなれし山路をいまさらに霞へだてて嘆く  
春かな(長秋詠藻・三六九)

御返しはなくて還昇を仰せくだすよし仰せられたりける、教長かきたてまつるなり

『山家集』には崇徳院の勘気を蒙った「ゆか

りありける人」のために西行が院へ「許したぶべきよし」を申し入れた際の院と西行の贈答歌（一一六三・一一六四）が収められている。『風雅集』雑上には除目の頃に不遇を訴嘆した行宗との贈答歌（二四四九・二四五〇）が、『今鏡』（すべらぎの中・春の調）には、行宗の叙三位を願ひ鳥羽院へ自ら歌を送った逸話が記されている。また、院は在位中から歌会で臣下に「述懐」題をたびたび詠ませていた（詞花集・雑下・三七七、千載集・雑中・一〇七七、成通集・三八）。

崇徳院は臣下から幾度も訴嘆を受け、かつ院自身も述懐歌を詠ませ、時には寄せられた願いを聞き届けるということを行っていた。『久安百首』における「短歌」設定も、このような理想的な〈帝〉を志向したふるまいの一つとして位置づけられよう。そして、百首作者に選ばれた歌人たちが、『古今集』撰者の長歌だけでなく、主権者の徳を讃え詠作の会を賛美し、謙辞や具体的願望を表す詩序の手法を「短歌」に取り入れたのも、このような院の志向を理解し、〈帝〉の命に応じて奉るにふさわしい表現を模索した結果と考えられる。

\* 1 『古来風体抄』は歌論歌学集成第七卷（三弥井書店、二〇〇六年）所収の本文による。

\* 2 松野陽一「組題構成意識の確立と継承―白河院

期から崇徳院期へ―」（『烏帯―千載集時代和歌の研究』風間書房、一九九五年）

\* 3 注2参照

\* 4 『古今集』巻十九・雑体に「短歌」という名称で、長歌及び反歌が六首収められており、『拾遺集』巻九・雑下では「ながうた」として長歌・反歌が六首、『久安百首』以後も『千載集』巻十九・雑下に「雑体・短歌」として、長歌・反歌が四首収載されている。

\* 5 拙稿「『久安百首』の羈旅歌」（『国語と国文学』86, 1, 二〇〇九年一月）

\* 6 久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、一九七三年）

\* 7 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』増補版（笠間書院、一九八八年）

\* 8 久保木哲夫「長歌とその意味」（『折の文学』平安和歌文学論）笠間書院、二〇〇七年）

\* 9 藤岡忠美『平安和歌史論―三代集時代の基調―』（桜楓社、一九六六年）

\* 10 小川豊生「和歌と帝王―述懐論序説あるいは抒情の政治学へ向けて―」（『和歌の力』岩波書店、二〇〇五年）

\* 11 峯岸義秋「歌合における述懐の歌」（『平安時代和歌文学の研究』桜楓社、一九六五年）、田尻嘉信「述懐の歌について―「有心」との関聯―」

- 〔『和歌文学研究』11、一九六一年五月）、内田徹  
 「述懐歌の形成」〔『文芸と批評』6、一九八七年三月）、小野泰史『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について―〔『和歌文学研究』76、一九九八年六月）、注10小川論考ほか。
- \*12 内藤愛子「堀河百首題述懐をめぐって」〔『文教大学女子短期大学部研究紀要』26、一九八二年十二月）
- \*13 注12内藤論考参照、『歌ことは歌枕大辞典』「述懐」の項（渡部泰明執筆、角川書店、一九九九年）
- \*14 注12参照
- \*15 注10参照
- \*16 注11内田論考参照
- \*17 峯岸義秋「歌合における述懐の歌」〔『平安時代和歌文学の研究』桜楓社、一九六五年）
- \*18 同年催行された「賀陽院水閣歌合」で勝利した左方人が「述懐和歌」を各々一首奉献したもので「志し折る験のかひありて嬉しくあへる住吉の松」（源実基）のように住吉神の神慮を喜び感謝する内容が多く見られる。
- \*19 このような発想は美清や公能のような歌歴の浅い若い作者に限ったことではなく、堀川などの老練な歌人にも見いだせる。
- \*20 『大日本史料』正治元年八月二七日所引「菊大

路文書」、『古事談』第五・一話。

- \*21 引用は新日本古典文学大系『古事談』（岩波書店、二〇〇五年）

- \*22 小侍従は応保元年（一一六一）頃、二条天皇に出仕し始める。

- \*23 注11峯岸論考が指摘するように、「述懐」題は『堀河百首』以後、社頭歌合の歌題として定着するようになる。『久安百首』以前には「西宮歌合」

「南宮歌合」「大治三年住吉歌合」で「述懐」題が設題されているが、不遇沈淪は詠まれるものの、

具体的願望を神に訴えることはなされていない。

- \*24 覆刻日本古典文学館『古今和歌集 清輔本』（日本古典文学会、一九七三年）を翻刻。

- \*25 竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（右文書院、一九七六年）、注11小野論考参照

- \*26 佐藤道生「平安時代の詩序に関する覚書」〔『平安文学史論考』武蔵野書院、二〇〇九年）

- \*27 木戸裕子「平安詩序の形式―自謙句の確立を中心として―」〔『語文研究』69、一九九〇年六月）

- \*28 注26、27参照

- \*29 注27参照

- \*30 注27参照
- ※『久安百首』の本文は個人別百首本の諸本の中で最善本とされる宮内庁書陵部蔵本（一五五・三六）を

用い、必要に応じて他本で校訂を行った。歌番号は『新編国歌大観』の番号を用いた。それ以外の和歌は『新編国歌大観』による。『本朝文粹』は新日本古典文学大系（岩波書店、一九九二年）、『続本朝文粹』は新訂増補国史大系（吉川弘文館、一九九九年）、『江吏部集』は『群書類従』第九輯（続群書類従完成会、一九九二年）による。なお、適宜漢字をあて、句読点・濁点・返り点を補うなど表記を改めた箇所がある。

本稿は、科学研究費（若手研究（B）24720097）による研究成果の一部である。

（本学准教授）